

令和6年度 第3回足立区こども計画審議会 会議概要

会 議 名	足立区こども計画審議会 第3回		
事 務 局	政策経営部 子どもの貧困対策・若年者支援課		
開 催 年 月 日	令和7年2月21日（金）		
開 催 時 間	午後6時30分 ～ 午後8時30分		
開 催 場 所	足立区役所 中央館8階 庁議室		
出 席 者	【委員】		
	藤原 武男 会長	阿部 彩 委員	末富 芳 委員
	山田 哲也 委員	加藤 泰弘 委員	高木 政代 委員
	中山 勇魚 委員	小野 茜 委員	菊地 美穂 委員
	田中 優哉 委員	山崎 衛 委員	太田 せいいち 委員
	しぶや 竜一 委員	ぬかが 和子 委員	水野 あゆみ 委員
	中村 明慶 委員	長谷川 勝美 副会長	
	【事務局】		
	あだち未来支援室 伊東 室長	子どもの貧困対策 ・若年者支援課 濱田 課長	子どもの貧困対策係 今 係長
	子どもの貧困対策係 清水	子どもの貧困対策係 樫村	若年者支援推進担当 加美山 係長
	若年者支援推進担当 済賀		
関 係 所 管	政策経営部 勝田 部長	地域のちから推進部 依田 部長	福祉部 千ヶ崎 部長
	衛生部 馬場 部長	教育指導部 岩松 部長	学務課 松本 課長
	子ども家庭部 楠山 部長		
欠 席 者	川上 重昭 委員		

会 議 次 第	1 会長あいさつ 2 こども計画「基本理念（案）」及び「柱立て」について【資料１・２】 3 こども計画「施策」の検討について【資料３】 4 第４回、第５回こども計画審議会の日程について 5 事務連絡
資 料	第３回 足立区こども計画審議会 次第 こども計画審議会 席次表 【資料１】第２回審議会でのご意見を集約 【資料２】基本理念案をもとにした計画の「柱」（案） 【資料３】施策の検討方法 【資料４】ライフステージごとの取組状況 【資料５】子ども・若者、保護者、地域・関係機関等の取組

令和6年度 第3回足立区こども計画審議会

○事務局

それでは、定刻を少し過ぎましたが、これから始めさせていただきます。ただいまから第3回足立区こども計画審議会を開催します。本日はお忙しいところお集まりいただきまして誠にありがとうございます。私は子どもの貧困対策・若年者支援課長の濱田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。本日次第に入ります前に、資料の確認をさせていただきたいと思っております。まず事前に次第とA4横の右肩に資料1と記載した資料。そしてA3横のライフステージごとの取組状況と記載した資料の3点を本日お持ちいただいているかと思います。そのうち、次第を除く資料に修正がありましたので、本日机上に差し替え分を置かせていただいております。まずA4横の資料1の5ページ。施策の検討方法とタイトルが記載されているページに一部誤植がありましたので、そちらを修正しています。それからA3横のライフステージごとの取り組み状況については、先日本配りしているものから、事業の追加等させていただいたものがございますので、最終版を置かせていただいております。最後に、机上配付した席次表。資料は以上となります。お手元に足りないものがありますでしょうか。大丈夫でしょうか。

続いて、前回の審議会と同様のご案内となりますが、この審議会は足立区こども計画審議会条例第8条により、会議を公開とさせていただいております。会議録についても、ホームページで公開させていただきますことをご了解願います。発言していただく際には、お手数ですがお手元のマイクのボタンを押していただきまして、マイクのランプが点灯しましたらご発言をいただいて、終わりましたら再度ボタンを押していただければと思います。それではここから藤原会長に進行をお願いします。

1. 会長挨拶

○藤原会長

皆さんこんばんは。寒い中お集まりいただきましてありがとうございます。議論の結果、持ち越しとなる議題が前回ありましたが、今回は、忌憚のない意見を述べ合って、本当に素晴らしいビジョンを作っていただければと思います。本日は阿部先生がご出席されているので、まず始めに阿部先生からご挨拶をお願いいたします。

○阿部委員

東京都立大学の阿部と申します。これまでは審議会に参加することができなかったのですが、今日皆さんの顔を見ながらお話をさせていただけるということで、大変期待していると共に、楽しみにしています。皆様のご意見、特に現場の方からのご意見というのも、私たち研究者にとっては非常に重要なインプットですので、ぜひ私たちの勉強にもさせていただければと思います。よろしくお願いいたします。

○藤原会長

次に、会長挨拶ということで、一言申し上げます。私ども東京科学大学になりまして、その中で未来社会創成研究院という、という地球外生命とか宇宙人を研究している地球生命研究所と、100年後の未来を研究している未来の人類研究センターのリベラルアーツの先生方と、我々ウェルビーイング創成センターの社会医学者が集まって、100年後のビジョンを作るといような組織の研究院長を担っております。今日そのキックオフだったのですが、その中でMITのメディアラボという有名なところがあるのですが、そこでのビジョンの話でテクノロジーというのは数年だけれども、本当にいいビジョンというのは100年持つのだという話をすごく印象深く聞いていました。今日ここでお話をする足立区こども計画の理念といったものは、まさに100年続くビジョンになるのだろうと思っていて、すごくワクワクしています。

そういう地に足を付けた現場の活動を足立でやっていますと皆さんに宣伝をしてきましたので、いい成果が出たら一つのスピノフということでご理解をいただければと思います。今日も引き続き活発な議論をよろしくお願いいたします。

2. こども計画、基本理念案、及び柱立てについて

3. こども計画、施策の検討について

○藤原会長

それでは次第2、こども計画「基本理念案」、及び「柱立て」について。また次第の3、こども計画「施策の検討」については一括して事務局から説明をお願いします。

○事務局

それでは次第2、3について、事務局の方で一括してご説明します。本日お配りしているA4横、右肩に資料1と書いてある資料をご用意ください。最初に前回こちらからお出しした、こども計画の理念について皆様から様々なご意見をいただきました。それに基づいて理念を再考させていただいたのですが、まず前回の審議会の中で皆様からいただいたご意見を振り返りたいと思います。

まず前回事務局から提示した理念ですが、「生まれ育った環境に左右されることなく、子ども・若者が未来へつながる道を選べる足立を作っていく」ということで、理念をお示したところ、各委員から大きくまとめて5点ご意見をいただきました。まず基本理念の考え方としては、一つの理念の中に、子ども・若者の将来像と区の基本方針の二つが盛り込まれていると分かりづらい感じがするといったご意見。理念の中に到達点として目指すべき高いゴールと掲げているが、これは努力し続けるための方向性なのかといったご意見。常に子ども・若者・家族といった当事者と一緒に作っていきますよということで、どのように理念を作っていくのかといったご意見。子ども観というのを行政計画として

示さないところが多いといったご意見をいただいております。

二つ目としては、子ども・若者の参画の視点です。こども計画の中でも、こども基本法の中でも重要な観点として述べられているところですが、こちらから提示した理念の中には、参画の視点が読み取れないといったご意見をいただきました。

三つ目は、幸せという言葉でいろいろご意見をいただきましたが、将来の幸せというところも重要ですが、将来の幸せに向かって進んでいくためには、今が幸せであることが大事であるといったご意見をいただきました。

四つ目は、こちらはいろいろと第1回目の審議会の時に皆様からご意見をちょうだいした中で、選択という言葉キーワードとして取り上げたのですが、選択という言葉には、同時に自己責任論というところも付いてくるところもありますので、この選択という使い方について、再考する必要があるということをご意見としていただいております。

最後に、生まれ育った環境に左右されることなく、というところについては、今までの足立区の子どもの貧困対策に対する取り組みのレガシーとして使うことについては、皆様了承をいただけたと考えています。

続いて1ページをめくって下さい。

今回は前回までの皆様からのご意見を踏まえて、区の方針として理念を示させていただくということで、今回理念1本で示させていただきたいと考えています。「子ども・若者のウェルビーイングをともに考え、生まれ育った環境に左右されない未来に向かって、ともに進む足立をつくっていく」。まず、ともに考え、ともに進むというところが、子ども・若者の参画の視点と捉えています。今の幸せ、未来の幸せというところについては、子ども・若者のウェルビーイングというところで表現しています。ウェルビーイングについては、多様な価値観がありますので、こちらから押し付けるのではなく、ともに考えていこうという考え方。さらに生ま

れ育った環境に左右されない未来に向かって進んで、後押しをしていくというところもあるのですが、一緒に進んでいくといったような足立区を目指していきたいというものを方針として示しています。

続いて基本理念の案のイメージです。次のページに示しています。子ども・若者が家庭環境ですとか、地域、それから行政等に見守られながら、周りからいろいろな支援を受けながら、前に向かって進んでいく。その中でいろいろな選択をしながら、いろいろな未来に向かって進んでいくといったイメージを理念の中に盛り込ませていただいておりますので、そういったイメージの案として入れています。

続いて、右肩に資料2と記載している資料です。先ほどの理念を実現するためにどういう観点で事業を組み上げていくと理念が達成できるのかという柱を三つ用意しています。まず一つ目が、すべての子ども・若者の生き抜く力を育む。これは子ども・若者に関する取り組み。柱の二つ目が、安心して子育てができる環境を提供する。これが子育て家庭への支援。柱の三つ目が、区が地域・団体等と共に支える仕組みを整える。これが地域における協働の体制整備について。これは第1回目の審議会の時に、皆様からも子ども・若者当事者への支援はもとより、それを支える子育て家庭についての支援。子育てというのは家庭だけであるものではなく、地域全体であるものだというご意見もいただきましたので、そういったご意見も踏まえてこういった柱、三本に整理しています。

続いて次のページをめくって下さい。

本日議論をしていただきたいところが、施策についての話になります。それぞれの柱1、柱2、柱3。すべての子ども・若者の生き抜く力を育む。安心して子育てができる環境を提供する。区が地域・団体等と共に支える仕組みを整える。それぞれの柱を実現するためにどんな施策を実施すると、それぞれの柱を実現できるのか、理念を達成できるのかというような施策を検討していただきたいと考えております。今こ

ちらに記載をさせていただいている施策については、第2期子どもの貧困対策実施計画の中で、施策として取り上げているものを参考として入れています。施策についてはこのレベルの内容を施策とさせていただいて、その下に具体的な事業がぶら下がる構成になります。今回皆様に参考資料として、ライフステージごとの取り組み状況。A3横の資料をお配りしていますが、施策の議論になるとなかなか意見が出しにくいといったこともあるかと思いますので、具体的に足立区がライフステージごとにどんな事業を実施しているのか、どの層に対して実施しているのかといったような資料を示していますので、こういったことも参考にさせていただきながら、具体的な議論をしていただければと考えています。どんな事業が必要かといった観点でもかまいません。よろしくお願いいたします。

○藤原会長

ありがとうございます。補足というか、資料3を見ていただくといいのかなと思うのですが、いきなり施策まで降りていったので戸惑った方もいるかもしれませんが、最初に、各委員に濱田さん・伊東さんが、各委員に個別に確認されたとは思いますが、基本方針としての基本理念の部分と、それに伴う柱立てについて確認をして、ご意見があればいただきます。その上で一気に、柱立てそれ自体の議論と言うよりも、施策の話をした方が充実するのではないかとということで、このようにご説明をいただいています。

ちなみに、柱立ての構成において意識されているか分かりませんが、有名なブロンフェンブレナーという心理学者が出しているソーシャルエコロジカルモデルというものに基づいて、それによってほとんどの多くの施策が世界中でできています。子どもを中心にして、その子どもに直接関わる人たちの支援があって、それを全体で支える環境の支援という枠組みなので、この考え方は適切なのではないかと思います。もちろん叩こうと思えば叩けますが、施策段階で工夫はできると思いますので、ここはいいだろ

うと考えています。

まず理念のところですね。「子ども・若者のウェルビーイングをともに考え、生まれ育った環境に左右されない未来に向かって、ともに進むアダチをつくっていく」ということで、良いかどうかということ、良いなら良いでそのご意見も含めてご意見をいただければと思います。いかがでしょうか。これまで議論に直接関わられてこなかった阿部先生、もし何かあればと思いますが。

○阿部委員

この基本理念案のところですね。ご説明をいただいて、私もその時に意見は言わせていただいたのですが。ウェルビーイングという言葉はより包括的な概念かなと思います。私はかねてから幸せという言葉があまり好きではなくて。というのは、幸せって変わりやすいです。それに比べてウェルビーイングは、非常に1日1日で変わる。変わりやすいというのは、例えばどこで大震災が起こって、自分がそのニュースを見ていると、自分は昨日よりも幸せだなと思うんですね。あの人たちに比べれば幸せだなと。私には大事な家族があって幸せだなとすごく感じるんですね。でもそれってその人のウェルビーイングが何も変わっていないのに、他の人を見ていて変わってしまう。そういう意味で、幸せというのは指標としてはどうかと思うところがあったので、ウェルビーイングになったのはとても良いなと思います。

生まれ育った環境に左右されないというところを残したというのも足立区らしくてよいのではないかと。やはりこれも貧困というところを忘れずに救っていくというのが、昨今の新しいこども計画の中ではだんだんと忘れつつある自治体がすごく多い中で、残していただけてとてもありがたく思います。

○藤原会長

ありがとうございます。あとは菊地委員から進むという言葉を書いていただいて、みんなス

トンと落ちてまとまったなと思うのですがいかがですか。

○菊地委員

お恥ずかしなからですが、私も自分で前回何を言ったかなと思ったら、それしか言えていないなと思ったのですが。こういう形で使っただけのことでもそうですし、あまりこの文章自体が強くないというか。本当に一緒に作っていきたいといった雰囲気が伝わってきてとてもいいのではないかと思います。

○藤原会長

ありがとうございます。他にご意見はありますか。よろしいですか。

では、シナリオ1。案がまとまった場合の原稿を読みますと、基本理念の柱立ては事務局案の通りとして、施策などの検討に進んでよろしいでしょうか。ありがとうございます。

では続いて次第3、こども計画、施策の検討についてに移ります。事務局からの説明がありましたが、施策を検討していきますが、お手元のライフステージごとの取組状況を参考にしていただきながら、具体的な話をいただければと思います。これはどこから始めてもいいのですが、これを見ていただきまして、ご意見をいただければと思います。

○阿部委員

この施策、元々足立区は様々な点で子どもの健康という観点から始めてくださっているのですが、メニューもすごく豊富なので、それ自体本当に素晴らしいと思うのですが。私は三重県のこども計画の策定に関わっていて、そこでは子どもの貧困の範囲がすごく薄いので、それは私も文句を言ったのですが。そちらですごく言われたのが、子どもの安全ということでした。それは例えば犯罪に巻き込まれないとか、防災といった子どものフィジカルな安全ですとか。それは、案の柱の2のところに入るのかなと思うのですが。安全な環境ということ。もしかすると1の

ところの自分を守る術を身に付けるといったところかもしれませんが、そこら辺が横のピンクのものでは、防犯プログラムがあるとか書いてあるのですが、その観点が薄いのかなと思うんですね。この頃一番ひどい状況に置かれている子どもたちをテレビのニュースなどで見るように、ラオスとかに連れていかれてしまった高校生がいるという状況がある中で、これからの子ども計画という点では、安全・安心。安心よりも安全ですね。安全をもう少しグレードアップする必要があると思いました。

○藤原会長

ありがとうございます。年齢的には高めのイメージですかね。

○阿部委員

そうとも限らず、例えば、そういう中には、防災といった、小学校や保育園の防災対策をきちんとするというようなことが含まれています。こども計画ですので、三重県の方では、非常に広く取っていたので。必ずしも年齢が高い子だけではないかなと思います。

○藤原会長

では濱田さん、今、現状はいかがですか。

○事務局

今防災ですとか、そういった観点では足立区も全体として取り組んでおりますが、子どもという切り口をテーマにして、安全というところを特に施策として切り出してやっているということはないと思います。この中には少なくとも入れてはいないです。この中に入れているのは、基本的には子どもの貧困対策。

○地域のちから推進部長

地域のちから推進部長の依田です。前任が危機管理部長をやっていたので、防災のお話で言うと、足立区の全中学校に中学生消防隊というものを作っていただいて、その子たちに防災教育をやっていただいています。避難所によって

ですが、地元の中学生在が避難してきた時に、一緒に手伝ってといった体制を取り入れているところもあります。そうした経験を通じて、災害時の身の安全も含めて勉強をしていただいている状況がございます。

○阿部委員

ぜひそういったところも強化していただきたい。それとネットの犯罪の対策も作っていく、強化をしないといけないと思います。

○藤原会長

そうですね。闇バイト対策みたいなこととか、どうなのでしょう。されているのでしょうか。

○教育指導部長

教育指導部長の岩松です。学校でセーフティ教室というのをやっていて、警察の方をお招きして、講座を実施したり、情報リテラシーということで、専門の方を呼んで啓発というのは行っています。そういったものもここに組み込むのであれば。

○阿部委員

そこも含めてより強化をしていく必要があるのではないかなと思います。その中には、金融プレビレンシーというか、そういったものも入ってくるかなと思います。今よりもおそらく強化しないといけないのがこれから10年なのかなと思います。

○藤原会長

ありがとうございます。思い付くことをどんどん今みたいに言っていく感じでいいでしょうか。今のことに関連して、闇バイトになぜなっているかという、パチンコなどに依存してお金がなくてという背景があると思うんですね。その依存症に対する教育とか対策ということをもうちょっと明確に具体的にやらないといけないと思います。私の研究的なことと言うと、依存になる背景というのがあって虐待とかトラ

ウマ体験ですね、そういったことへのケアといったことから、根本的に何かやると、より上流で防げるのかなと思います。そのあたりが入ってくるといいかなと思うのですが。

○衛生部長

衛生部長です。ずいぶん前からお世話になっております。ありがとうございます。薬物依存のところでは、薬剤師会などが学校に入って、薬物の依存の教育などはしておりますが、足立区は実は喫煙率も高くて、それは結構小学校の高学年ぐらいから何らかで吸い始めています。たばこが結局はその後覚醒剤とかにも移っていきますので、そこは強化する必要があると思います。この計画の中で学校教育のところと連携をしながら、指導を展開していくとか。あと私たちは自殺対策でSOSの出し方教育ということで学校に入っているのですが、そういったこともここに含めていって。トラウマとか虐待を受けて傷ついたお子さんがどうやってSOSを発して、誰につながると良いのかとか。そのためにつながり先である学校の教員とか、子どもたちを支援するいろいろな方がどうやってSOSをキャッチして、それを他の専門職につなげるとか、そういったあたりを入れられれば入れていきたいと思いました。

○藤原会長

ありがとうございます。もうちょっと踏み込みたいのは、今薬物とおっしゃったのですが、いわゆる違法薬物ではなくて、風邪薬ですね。精神神経センターの松本先生からも、パブロンゴールドは金パブと言って、金パブが大量に消費されて、肝臓が肝硬変になった高校生が受診しに来るらしいです。もちろん極端な例かもしれませんが。たばこの話も加藤校長からいつかうかがったりもしています。もう少し普通にアクセスできるものに対する依存の話もあるのかなと思います。そのあたり、加藤先生、現場感を受けてコメントをいただけますか。

○加藤委員

今お話があった中学生に対するセーフティ教室だとかそういったことは、本校に限らず、都立高校のほとんどが、セーフティ教室という名前でやっています。薬物はほとんどの学校でやっていると思いますし、それから、性教育ですね。避妊だとか、少し遅いのではないかとと思われる方もいるかもしれませんが、そういったことも本校ではやっています。それから、自殺防止は東京都の喫緊の課題で、課題なのに高校生の生命に関する案件は増加傾向にあるので、そういったところもいかに防止するかが大きな課題になっています。お話を聞いていて、言おうかなと思ったのですが、高校段階ではなくて、それ以前の段階でも区としてもおやりになっているということで、そこはうまくつながっていけるといいのかなとも思いました。

○藤原会長

ありがとうございます。

○中山委員

今のお話と関連してですが、この施策の一覧を見ても、小学校高学年から中高生の居場所とか、どちらかというと認知能力の向上とか、ハンデを抱えた子たちのサポートというところは非常に充実していると思うのですが、そうではない言葉の付かない悩みとか、上手くいってないんだよなとか、学校はつまらないんだよな、といった子たちが気軽に行けてつながる場所がないなと思ってしまして。ユースセンターはそうかもしれませんが。僕たちのやっている居場所にも、学校に行っていないとか、通信制の高校に行っていて、実質ほぼ行っていないというようなことで、家に帰っていないくて、「これからト一横に行く」とか、「名古屋のドン横に行く」という感じで。「それもうやめた方がいいんじゃないの？」と言っても、「そこに行くとお金も稼げるし、今は家もないから」という感じで、そういうところに行ってしまう子たちがいて。つながりないんですよ。特に中学校が

今我々の学童を卒業した子たちも、地域によっては半分ぐらいが私立に区外進学をしているような状況で。残った公立の中学に行く子たちが、話を聞いていると部活がなくなっていたりとか、小学校まで友達だった子たちが半分近く受験をしまって、どさっと抜けてしまうことによって、何かつまらないということがあったりして。普段放課後は家でゲームをしているとか、ネットをやっているという状況になってしまっているの、そういう子たちが生き生きと生活ができる、もしくは親にも学校の先生にも言えない悩みを吐き出せたりできるような場所というのが必要なのではないかと思います。

○藤原会長

ありがとうございます。居場所という中で、子ども自身が安心することもありますし、そこでの出会いというか、人との出会いというものがあるので、非常に重要なと思います。低学年の子たちもスクールソーシャルワーカーとして見られている高木委員、いかがですか。あまり見えないところも見えている気がしますが。

○高木委員

先ほど自殺の話が出たのですが、非常に低年齢化が顕著だなということを、本年度すごく私どもの方で感じています。今までは中学生以上かなというケースが多かったのですが、今小学生がリストカット、あるいは、自殺念慮、死にたいということを口に出したり、その辺の対応を命に関わっているの、すぐに緊急対応ということで。たまたま先日も病院に救急搬送というようなことが小学校からありました。そのあたりに関わることもありまして、非常にスピードを求められているなという感じがあります。ですから、中山さんがおっしゃったように、子どもの居場所が必要。その子たちは特に学校の先生に聞くと、そんなふうに見えなかった、気が付かなかったということが多いです。子どもたちの関係性というのが、水面下で、表に出てこないところで一体何が起きているのかという

のを、特に今年度は感じているところがあります。先ほどの施策の中でSOSの出し方授業があるということを、私も言葉は聞いているのですが、なかなか実際に学校の現場で授業を見たことがないので、そういうところも大人たちが知っていくことも必要なのではないかと思います。子どもたちが自分の気持ちを出せる場所というのは、今後の課題の一つなのかなと思います。

○藤原会長

子どもの気持ちが出せる場所ということで、公募委員の皆様、いかがですか。今もそうかもしれませんし、昔を振り返ってみて、こんな事業があるといいのではないかと。

○小野委員

小野です。居場所、何でも言えるような場所があるといいなということに関して思い出していたのですが。今私は児童養護施設のボランティアをやりながら、大学1年生から3年生の子たちとよく会って話をするのですが、オーバードーズが一般化している感じがあって。立て続けに5人と話したうちの3人ぐらいの子に、「最近薬を飲んじゃって運ばれてさ」みたいな話とかを聞いて。その話を違う大学生の子に相談してみたんです。「こんなことを言っているから、仲間だしさ」みたいなことを言うと、「よくある話だから、そんなオーバーに考えすぎなくても大丈夫です」みたいなことを言われてしまって、というところもちょっと気になってはいて、それが実際にどうか分からないのですが。私はその子たちの10個上ぐらいのお姉さんみたいな感じになると思うのですが、その話を数回、3～4回、月に2回とかの頻度で会うような大人にすら話してくるというのは、何かしらのSOSだろうなと思っていて。よくよく話を聞いてみると、家庭にすごく複雑な事情があったり、何度も精神病院だったり保護され掛けていたりとか、虐待で一瞬保護施設にいたとか、いろいろな事情があるというのがあって。こんな私にも

そんなことを言うんだ、と思って。高校生ぐら
いまででたくさんの事業の終わりの線が見えて
いるところがあると思うのですが、大学生とか
に対して、ちょっとそういうふうになにかしら
言葉を掛けてあげられるような支援というか、
あまりうまく言葉にできないのですが、あると
いいなと感じました。

○藤原会長

ありがとうございます。他にいかがですか。

○山崎委員

山崎です。今子どもの安全というところから
話がいろいろつながって広がってきて、今居場
所というところに来ていると思うのですが。今
のオーバードーズの話もそうですが、安全って
かなり大事だなというのを今聞いていて思った
んですね。安全教育、防災とか薬物乱用とか、
いろいろなことがされていると思うのですが。
かつて教員をやっていて、今、巡回相談で区内
の小中学校を回って見ているのですが、その○
○教室をやった時に、本当に届けたい子がどの
ぐらい理解して聞いているかというところが一
つ気になるのと、あとは夏休み明けから来なく
なる子って結構出てくるんですね。そういつ
た子が休んでいる時に教室を開いても、おそら
く届かない。1回で終わってしまうという、そ
ういうことがあると、施策として取り入れて、
年に1回ずつこういうことをやっていきましょ
うとやったとしても、実際に届けたい子どもに
果たして届くのだろうかという懸念が現場感覚
としてはあるかなと思うんですね。

不登校がかなり増えていますし。子どもの命
の問題というのも、今かなり自殺者が増えてい
るという話も出ていますので、不登校対策も含
めて、居場所というものを考えていけないとい
けないのかなとは思うんですね。スモールステ
ップルームとか、足立区もすごくいい施策があ
るのですが、まだ広がりきっていないというか。
徐々に徐々にという段階だと思うのですが。よ
り拡充して、子どもたちをよりサポートして、

居やすい場所が増えていけばいいなと思います。

○藤原会長

ありがとうございます。今の話で私の方に寄
せますと、いろいろな現場の学生なり、子ども
たちの生きづらさがあって、オーバードーズと
かもあると思います。その背景に虐待とかある
のですが、根本的にまず生きるベースとしての
貧困というものです。そこを上げていかないと、
そもそも何をやっても駄目だろうと。いろ
いろな授業をやっても、行きたくても行けない
わけですね。届けたい人に届かないというこ
ろがありまして。まさに今阿部先生がいるか
ら言うわけじゃないですが、そこがインフラと
して、子どものインフラとしての貧困対策とい
うところですね。それをどうやるのかというの
は、事務局の方にお任せをしますが。多分そこ
がまずあるのだろうと。もう一つは、具体的
な虐待、被虐待児へのケアということですね。
これは僕らの業界ではトラウマインフォームド
ケアとか、トラウマフォーカスト認知行動療法
といった形で、欧米のものが日本でも知見がた
まってきたりして。結構できる先生も増えて
きていて。例えば足立はベースとしての貧困対
策もやるし、それに伴って出てくるトラウマに
対しても、こういうセンターを作って、ここに
常駐させて、病院のネットワークも作って、そ
こにいるのは専門のできる人かもしれないけれ
ど、小児科も精神科も、あるいは一般の内科の
先生もちゃんと研修があって、リファできるよ
うにしていく。それは医療モデルなので、後手
なものです。やっぱり必要なものだろうと。
その先の問題をより未然に防ぐという意味では
ありなのかなという気がしました。

現実味は置いておいて、何が必要だろうかとい
うことを議論してみてもいいでしょうか。で
は他にある方、どうぞ。

○田中委員

前提というか、生き抜く力というのが広い概
念だなと思っていて。この中で先ほどの経済的

な貧困をまずやった方がいいとか、社会的なつながりが必要だよねみたいな話もあると思いますが、ここはカテゴリーを分けていただいて議論をしていくとか、施策を考えていった方がいいのかなと思いました。

先ほどまでの話と関連してですが、格差って後々に後手に対応すると、どんどん対応するのが難しくなってくるというか、ウェルビーイングが下がりきった状態で対応してはもう遅いというところがあるのかなと思います。できるだけ早期にというところで、特に未就学段階でも手を差し伸べていってほしいというのが、今小さな子どもを育てる身としては思っています。うちは比較的安定している世帯だと思うので、両親がしっかりと子どものケアをしながら育てていくようなことができる一方で、それができない家庭だと、小学1年生の入学段階とかでも結構な差ができてきて、それがその後の格差にもつながっていくのかなと思うと、親の文化資本の差とか、家庭環境の差のようなところをしっかりと埋めていくという施策を採ってほしいなと思いました。

○藤原会長

ありがとうございます。そこの部分、私も本当にそう思っています。事前の打ち合わせでも事務局の方にも言いました。イチロー・カワチ先生というハーバード大学の教授が足立に来てくれた時の講演でも、早期教育の重要性ということを書いてくれました。足立区の公立の保育園に何か非常に充実した教育プログラムをやるというところが、落とし所だとは思いますが。一方で私立の保育園と幼稚園は、何も手を付けないのかというところも、ここでの議論としてはなにがしかの連携はあっていいのではないかなというふうな気もしています。

○子ども家庭部長

子ども家庭部長の楠山と申します。乳幼児期からの体験とか、レジリエンスとか、自己肯定感を付けるとかっていうことは当然重要なこと

で。実は来年度、ここには載っていないのですが、東京スクワクプログラムと言って、各保育園に最大150万円、体験活動をしていただくお金を補助する制度を開始します。公立・私立幼稚園対象になっていますので、来年度100園ぐらい手が上がっているのですが、公立を含めて、150万円以内でいろいろなところに行っていて、報告書は出さないといけないのですが、少しでも就学前の段階でそういう活動をしていく。保育園を支援する形でやっていきたいなというプログラムが、来年度新規予算はこれからですが、計上をしているところです。

○藤原会長

ありがとうございます。私は知らなかったのですが、体験をするんですね。未就学児がどこかに行くということですか。

○子ども家庭部長

行ってもいいですし、園のプログラムで使ったものを買ってもいいですし。いわゆる何でもいい形です。

○藤原会長

それは公立も私立も保育園なんですね。

○子ども家庭部長

幼稚園も対象です。

○藤原会長

そういったものもありますが、多分それがどういう効果があるかということの評価する枠組みもないのかなと思いますし。そうしたことも含めて、ぜひ足立区ではやっていただきたいなと思います。他にいかがでしょうか。

○小野委員

小野です。私は結構足立区から送られてくる広報紙を毎回読んで、今回この公募委員も見つけるぐらいはしっかりと見ていたつもりなのですが、ここに書いてある事業を一つも知らなか

ったというか聞いたことも見たこともなかったんですね。なので、行政の方でそういう世帯に正しい情報が行き渡ることに、同じぐらいのお金を使った方がいいのではないかな。一人親世帯のことにに関して、子ども貧困対策実施計画の報告書にも、すごくいいものだけど、参加者が少ないと書いてあったりして。その辺結構バジェットを取っていただく、該当する家庭にはダイレクトにメールだったり、書類を送るぐらいのリーチを拡大することを優先した方がいいと、何も知らないなと思ったので、そのように思いました。

○藤原会長

すごく重要なご指摘だと思います。それはどうやったらいいのでしょうか。多分Aメールというか、足立区と電子的につながっていて、何かマイナポータルで該当するところにはメールが行くみたいになるのでしょうか。

○子ども家庭部長

子ども家庭部長です。来年度、また全家庭に家庭訪問をする事業を始めます。子育て支援アプリというものを10月から導入することになっています。今はウェブ版のそういう子育て支援のサイトがあるのですが、それをアプリ化することによって、いろいろな施策のご案内を直接プッシュ型でのご案内できるような形です。予防接種の時期になったら送られたりするのですが、それ以外の子ども施策についても、直接保護者に区の状況とかご案内ができるという形で今検討しているところです。

○小野委員

ちなみに、今のウェブ版の使用率というか、アクティブユーザー率ってどんなものなのか。

○子ども家庭部長

分かりません。

○衛生部長

予防接種アプリであれば、子育てのアプリはいくつかあるのですが、その中で予防接種のアプリがあるのですが、大体年齢にもよりますが、今は6割ぐらい使っています。

○長谷川副会長

プッシュ型というところでは、最近こういう話がありまして。小学校のお子さんが通っていると、シーフォースという保護者との連絡のツールがあるのですが、そこに役所からの連絡が多すぎて、情報が多すぎて、プッシュ型では迷惑だという話があるんですね。子育てのターゲットでプッシュ型はやるのですが、対象も絞ったりはするのですが、逆にプッシュ型が多すぎて、もうちょっと絞ってくれという話があったりですね。なかなかその辺は子育て、これからプッシュ型を入れますが、そこも一つ難しい問題だなという感じがしています。

○小野委員

A I とかの力を借りて、本当にその人に必要なものだけをお届けされる仕組みとかって届けられないのですか。

○長谷川副会長

今ちょうど生成A I はうちの方でも入れて使い始めたというので、今言ったことはおそらくこれからできるようになると思います。ただ、今のところはそれがないので、プッシュ型の情報が多すぎる状況に、今学校の保護者の関係はなっています。

○藤原会長

まず入り口のところで母子手帳が電子化されます。日本全体として、これは足立区も多分その対応をしようとしているのですか。

○衛生部長

これからです。

○藤原会長

これからですね。例えば母子手帳って日本が誇るべき素晴らしいもので。何十年も続いています。何ならお母さんの情報まで分かっているのですが。母子手帳の血压とか、予防接種歴とかって、先生とか看護師さん、あるいは自分で書いたりするじゃないですか。あれって本当なのかというふうに私がそれを論文とかに書いたりすると、突っ込まれるんです。それは電子的にあるということが非常に重要で、要するに母子手帳の情報と、産婦人科の情報とか、理想的にはリンクをされると利活用しやすくなる。予防接種もそうですね。本当に打ったのかどうか。シールを貼り忘れていたり、番号を間違えるようなこともないだろうと。それと同じような形で、どういう経済状況かということも理論的にはリンクされるはずなんですね。夢物語としては、そうしたものが全部A I とかが判定して、この人に必要な情報、あるいは事業はこれなのだというふうに通知が行くということを、どの自治体も考えていますけど、どこもできません。

なぜかという、母子手帳の電子化をすることは、電子化をすることと、医療情報とか自治体の情報と連携することがものすごく大変で、そこにしか注力されていないんですね。どういうアルゴリズムでどういう人を拾い出すかということに関して、全然頭が及んでいないです。私も何度もトライをしたのですが、全く見向きもされないの。逆に足立はそこを念頭に置いたシステムを作りますと言ってやったら、全国に広まるかもしれません。そのぐらいベンダーは全然そこまでできていないんですね。ということをまずは言っておきたいです。A I がすべて解決しますみたいな夢物語はないんです。現場とやっているとよく分かるので。アルゴリズムを作る側にいるので、データがあればできるというところは、なかなか連携できない状況にあるので。だからといってできないと言っているのではなくて、そういう本当に理想的なものを掲げて、施策とか事業として落とし込んでいくということを考えるために今があると思うの

で。貴重なご意見ありがとうございます。

○阿部委員

私はどちらかというとA I とかテクノロジー反対派の方なのですが。もちろんそういうのもすごく必要だとは思いますが。でも、今私たちが分析した中で、例えばどんな人が学習支援事業に行くのかとか、子ども食堂に行くのという、結局ママ友が多い人です。誘い合って行くんですね。たとえ情報があっても、1人ではなかなか行こうとは思わない。いろいろな子育て事業をやっていますよと、こんな体験プログラムをやっていますよと誘い合う人がいないと、なかなか行かないのではないかと思います。

そうすると、ママ友を作っておきますかって、それはなかなか難しいかと思いますが、一つやれるのは、例えば、P T A とかの参加率が貧困層が低いのは分かっていますけど、それでもまだ行く方だと思うんですね。P T A のその場でこんなのが来週ありますよというようなことを宣伝するとか。非常にローテクではありますが。そうしたら、へえ、そんなのがあるんだ、って言って隣の人と、いいわね、って言うかもしれない。もう少し人と人とのつながりの中で行くことも追求していくべきではないか。孤立しがちだということはもちろんあるのですが、だからといって、i P h o n e でできると期待するのではなくて、人と何となくつながっていく。貧困層の中では、ママ友もありますが、ケースワーカーとか、保健師とかが働き掛けた人が行くんですよ。やっぱり最後は人じゃないかなと思います。それをただ紙で配るのではなくて、情報を与えるのではなくて、一緒に行こうよという人が必要かと。昔の言葉で言えば伴走支援かもしれませんが、それをもうちょっとローカルレベルでお互いにそういうことができるようにしていくのがいいのではないかと思います。

○藤原会長

おっしゃる通りだと思います。私もそういう

研究結果を出してきました。

○水野委員

今、阿部先生のお話をうかがって、私も子ども食堂に携わっているのですが、まさにスクールソーシャルワーカーの先生方が、不登校になっていてネグレクトのご家庭と一緒に連れて来てくれるんですね。またSODAで心の病を抱えている子たちについても、伴走型で一緒に来てくれて、子ども食堂は最初は食べているだけだったのですが、そのうちお手伝いに来てくれるようになっていきます。そういった意味では、現場で頑張ってくれている先生方の伴走型が大事だと感じています。

○藤原会長

ありがとうございます。

○田中委員

今の話とも関連して、ママ友・パパ友のコミュニティが不足しているというのを実感しています。保育園とかって皆さん働いているので、忙しすぎてそういったコミュニティを形成する暇がないというか、そういった機会がないので。例えば行政がやるものって、平日の昼とか、専業主婦を対象にしたものとか。あとは明らかに老人向けだろうみたいなヨガ教室みたいなものが多かったりして。若者とか働いているパパ・ママが参加できるイベントってものすごく少ないなと思っています。子ども食堂もその一つなのかなと思いますが、平日の夜自然に集まれるような仕組みを作っていただければ、別にわざわざ行政が呼び掛けなくてもその中で勝手にママ友とかパパ友のコミュニティはできていくし。その中でいろいろな情報交換をしたりして、何かにアクセスできるようにするみたいなところができてくると思います。もう少し対象を絞った形で、特定のところに偏らない形のイベントを増やしていただけたらなと思っています。

○藤原会長

ありがとうございます。そうだなと思います。土日にやること、夜にやることは理論的にはできると。

○地域のちから推進部長

地域のちから推進部長です。地域学習センターとか私が所管なので、私からお答えをすると、様々な教室がいろいろありますが、指定管理者がやってくれていますが、土日が多い。平日の昼間が多い。議会からお一人様も含めて平日の夜間やったらどうですかというお話はいただいているのですが、今までチャレンジした結果としては、教室ごととかはあまり集まらない。なぜかという、これは推測ですが、働いている方が多くなってきているところで。実は学習センターの学習室も昔は夜が多かったんですね。生涯学習でサークルを作った方が、働き終わって夜やっていたのですが、今その方々がリタイアをして、今昼間の方が結局学習室が埋まっていて、夜は比較的空いているというデータも最近は出てきています。平日の夜に何らかの教室をやって集まっていただくというのが、需要と供給のバランスを見ながらトライをしていくというのは、我々も意識している状況です。

○衛生部長

衛生部です。子育てのところで言えば、コロナの頃に途絶えたのですが、妊娠期の母親学級。今はこれファミリー学級と言いますが、4回シリーズで3回分は保健センターで、お母さん向けに平日だったりするのですが、4回目はできるだけ土曜日にしています。パパと一緒に来ていただいて、経験あるかもしれませんが、沐浴をしたり、先輩パパ・ママの話を聞いたりして、その4回が終わってから半年後にOB会ということで、皆さん生まれたお子さんを連れてきて、月に1回OB会をやりながら、ママ友・パパ友を作っていくというのをやっていました。特に4回目、パパと土曜日にやるというのは好評です。今、日曜日のファミリー学級というのもあります。それは本当にパパと参加ができるので、

それも好評です。

OB会はコロナの頃に中止したことはあるのですが、改めてパパも土日に一緒に来られるような、子どもを理由にするとパパでも疲れてでも出てくれますので、私たちも増やせるように検討していきます。

○藤原会長

ありがとうございます。

○中村委員

行政の取り組みとして、教育長の中村です。ママ友・パパ友というところで、小中になります。PTAがあります。PTA活動が今沈滞気味です。活発なところは親父の会とか、そういったところで交流を図られたりしているのですが、なかなかそれも進まずで。PTAも連合会という形で中学なら中学の連合会、小学校は小学校の連合会というのがあるのですが、その連合会からも抜け始めているPTAがあるというのが実態です。ただ、そこを何とか今を維持する、ないしはもっと結束を高める意味で、連合会に相談をしながら、組織も支援するような助成をして、連合会の活動を活発化して、組織力を高められないかなとか、そういったところは検討しています。いろいろな手立てをしないと。つながりを何とか維持することはとても大事なことだと思っているので、いろいろお知恵があれば取り組んでいきたいと思います。

○藤原会長

ありがとうございます。保育園とか幼稚園とかうちの子たちも経験していて。保育園・幼稚園と違うところでパパ友・ママ友というと、少しハードルがあるのですが。例えば送り迎えの時に、長居ができて、お茶ができて、その時に一緒にいた人と話せるというだけでだいぶ違うのだらうと思うんですね。保育士にパスをして、はい、よろしく、というのがすごくもったいないと思います。本当はそこで保育士と親とが、昨日家ではどうでしたか？ といったコミ

ュニケーションも多分前提ではされているのでしょうけれども、実際にはなかなか忙しくて、それができていないというあたりを、サポートしたり。それで場所を開放すると、保育士の拘束時間が長くなる部分に対しては補助をするとか、そういうのとかはどうなんでしょうか。現実的じゃないですか。

○子ども家庭部長

一応保育士も、その日にあったことを簡単には伝えるという形を言っているのですが、なかなかできていない実態があるかもしれません。場所は保育園によってはホールで受け渡しをするというところもありますし。コロナの前は運動会とかそういうところで交流がありましたので、ママ友・パパ友がおむつの交換の時に話をするすることで、ママ友・パパ友の交流は保育園の場で一番仲良くなるというのが、さっきのファミリー学級もそうですが、働き掛けるような取り組みはしていければなと思っています。

○藤原会長

ありがとうございます。他にいかがですか。

○加藤委員

話題が変わるかもしれませんが、今までお話があった、人と人とのつながりから子どもの支援をしていくというようなところで、そういう話が出たら話をしようと思ったのですが。私は都立高校の教員ですが、今日は学力検査、入試の日でした。入試なので、いろいろな中学生が受験をしてくるわけです。東京都としては、例えば障がいがあるとか、けがをしているとか、そういったような場合は、何らかの配慮をします。外国籍で、例えば日本語が不自由な受験者の場合も、問題文にルビを振ったりとか、条件はありますが、国語以外は辞書を持ち込んでも良いといったそういった配慮をしています。

本校にも外国にルーツを持つ生徒が少なからずいます。資料で言うと、真ん中ら辺に外国ルーツというところでいろいろと事業があります。

生徒は本人が日本語があまりできないという生徒がいます。今日受験した受験者は、まだ日本に来て間もなく、日本語を習い始めて3か月だったのですが、それでここまで回答できるのかというぐらい、すごくよく頑張っている子です。ただ、まだまだ日本語が不自由である。でも、コミュニケーションは取れるという生徒は少なくありません。日本の学校に入ろうという生徒ですから。一方で、保護者が日本語を話せないというのも少なくないですね。例えば本校にいる中国語を母語にしている生徒は、なかなか他の生徒とコミュニケーションが取れないのですが、非常に向学心があって、国語は今ひとつですが、数学や英語は本校はあまり学力的には高い学校ではありませんが、ちょっと物足りないのではないかというぐらい力を持っています。でも、言葉があまりうまくないので、なかなか友達ができないですね。そうすると、1人ではなかなか行きづらい。一緒に連れ添ってという話もありましたが、それが外国にルーツを持つ子どもはできない。保護者はもっとできないという状況があります。そこを何とか支援できないか。例えば、東京都でも全くやっていないわけではないのですが、子どもがいる家庭で通訳ができる支援員をどこかに常駐してもらって、それを気軽に利用できるような、それは学校に伝えたい時に、その通訳を連れてきて、話をするとかですね。

それから、少し話は飛びますが、知的障がいのある方がどこかに遊びに行きたいという時に、付き添いの仕事というのがあるんですね。映画に行きたい。買い物に行きたい。動物園に行きたい。そこに専門の介助員が付き添って、一緒に行くという仕事があるのですが、支援員と一緒にどこかに رفتりすると、例えば区の事業として様々なサービスを展開していると思いますが、分からないわけです。どんなサービスをやっているのか。足立区に住んでいながら。でもそういった支援員がいると、そういった情報も入るようになるし、気軽に相談できるというようなそういったことがあるといいなと思います。

す。

事務局の資料の外国ルーツのところで言うと、外国にルーツを持つ子どもに対する学習支援事業というのがあって。スマホで調べてみると、確かにあるのですが、竹の塚の教室は満杯で募集していませんと出てきます。他の教室は募集しているところもあるのですが、ネットを見る限りでは、対象は小学生だけみたいで、高校生が気軽に活用できる所がない。それから足立外国ルーツの子ども支援「まるかるネット」がありますが、それも高校まで伸びていますが、こういった支援なのかというのが分かりにくいようなところが今ざっと調べただけですが、あるんですね。いろいろな事業がありますが、当たり前ですが、レベル感が全然違って。うまく活用できないようなものもきっとあるのではないかと思います。現段階では、話があちこちに行きましたが、外国にルーツを持つ子ども、小中学生は詳しくは分かりませんが、少なくとも高校生はウェルビーイング状態にはなかなか得ないし、生まれ育った環境に左右されているし、なかなかコミュニケーションが不自由なので、共に進めないというような現状があるので、そういったところにも目を向けて、支援をするような事業を立ち上げていただきたいと切に思います。

○藤原会長

大変貴重なご意見ありがとうございます。

○地域のちから推進部長

今話題に出ていましたが、外国にルーツを持つ子どもの居場所を使った学習支援というのは、うちの地域調整課の多文化共生という担当のところでやっていますので、今現在は竹の塚が人気の場所で、40名定員が既にいっぱいです。それから今東部エリアと西部エリアにこじんまりとサテライトで設置をしているのですが、東部エリアは定員がいっぱいというところで、今ちょうど予算審議をしていただくタイミングになっていますので、令和7年度予算をお認めい

ただければ、少し拡充をしたいところです。東西とも中学生まではいいですよ。竹の塚についても人数を多くしますと。原則小中という形にしているのですが、高校生についても、可能であればお受け入れをしようかなということで考えています。それとは別に、日本語家庭教室というのが、NPOの方々にやっていただいています。今現在21団体あります。得意ジャンル、不得意ジャンルがそれぞれ特徴があるということでお聞きしていますので、多文化共生の担当にお問い合わせをいただけると、どこがどういう特徴の団体がありますよというのは、多文化共生の担当が把握していますので、ご興味があればお問い合わせをいただければと思っています。なかなか状況は厳しいので、すぐにじゃあそこならマッチングができるかという、そこまで私も情報は持ち合わせていませんので、参考までにということでご了解をいただければと思います。

○藤原会長

ありがとうございます。二つあるのかなと思ったのは、一つは外国にルーツを持つ方への日本語教育の支援ですね。足立の調査で、今年度、1年生の約7%が外国にルーツがありました。これは報告書がもうすぐ出ると思います。それなりのポジションであると思います。私がアメリカにいた時に、アメリカの外国語政策というのが、小学校は必ずESLという英語を学べるところがあります。中学・高校は、高校とか中学によるので、ESLがあるところに行かないといけないというのはあるのですが、満杯で行けないということは絶対ないです。なので、そうした政策というのは、ちょっと考えていただきたいなと思いました。

もう一つ、学校に通訳とかサポートをする人を置く話なのですが。ただ単にGoogleトランスレートで日本語にしたからいいでしょというのは、最初がいいのですが、頑張って分かっていくというのがあるのでいいのですが、絶対に分かっていないなと思うんですね。

つまり何が言いたいかというと、結局その通訳というか、その国の言葉は文化を伴っているものなので、そこまで分かった人がいないと、なかなか難しいだろうなと。フィリピンの方は英語でいいかとは思いますが、微妙に違うんですよ。フィリピン人にタガログ語で話すとめちゃくちゃ仲良くなれるんです。それは私もフィリピンに居たので分かるのですが。また留学生でアフリカからもいるのですが、ガーナは公用語で英語ですが、使っている英語も微妙に違うし、宗教性だったり、陽気さだったり、それが故のダンスとかハグとかがない日本に対しての焦燥感みたいなものをすごい言うてくるんですね。アフリカ系の方はあまり足立にはいないかもしれませんが、ネパールとかベトナムとかミャンマーとか、それぞれの文化があることをやっぱり踏まえた通訳の支援ということも、どうせやるならそこまで研修したりしてやっていくような施策があるといいなと思います。何なら東京外国語大学にはそういうことが分かっている先生たちがいっぱいいて、やりたくて実はうずうずしているのも私は知っているんですね。そこまで広げすぎかもしれませんが、ブレーンストーミングとしては言いたいなと思いました。

○加藤委員

フォローしていただいてありがとうございます。今の話、非常に助かったのですが、私が言いたいのは、日本語の学習支援というよりも、自分の母国語で気軽に話せる環境を整えてほしいと、そちらに重点を置いてほしいということです。

○地域のちから推進部長

令和3年から外国人実態調査を区の方で学識の先生方と一緒に研究という位置付けでやらせていただいている、令和7年度は、外国人が増えているのですが、先ほどの外国にルーツを持つ学習支援事業の中で、子どもたちは比較的勉強が進んで、日本語ができるように少しずつな

っていつてます。親御さんが当然いるのですが、うちの区役所の窓口に外国の親御さんが困りごとの相談に来ますかという、実はあまり来ないんですね。多分外国人のコミュニティの中で解決しているのだろうと思っています。どういうコミュニティがあるかというのは、区役所ではまだ把握ができていないので、令和7年度はそこに挑戦をしてみたいと思っています。そこが少しひもとけてくると、今委員の皆様がおっしゃっているような母国語でのやりとりですか、母国を尊重した生活習慣といったものにも、少し我々が入っていける可能性はあるのかなと思っています。7年度に初めてやってみるので、どこまで把握できるようになるかは、やってみないと分からないけれど、今取り組む予定にしています。

○阿部委員

外国ルーツの子どもたちに関してですが、おそらくコミュニティがあるだろうというのは正しいと思うのですが、そこも出身地によって、例えばフィリピン国籍の方などは、非常に強いコミュニティがあったりするのですが、他の国籍の人はすごく孤立しているところがあったりするんですね。私は都立大学ですが、都立大学というのはすべての留学生に1対1のサポートを付けるんです。あなたはこの人。付いているのは日本人の学生です。日本人の学生だと親御さんたちのサポートがあると思いますが、都内にはものすごくたくさんいろいろな大学があるので、1対1で、その方にマッチして、何か困ったことがあったらこの人に相談ができると。「このラベル何？」って写真で送ればそれについて解説してくれるとか。「こういう通知が来たんだけど、どうなの？」みたいなことを。本当に都立大でのチューターシステムというのは、すごく安いのですが、少なくとも最初の1年間は留学生は何かあったらこの人に相談ができるという人ができるんですね。そういったものを学習支援事業でボランティアをやってくれる大学生の枠をもう少し広げて、そのようなサポー

トもやってくれるというところをリクルートして、事業として展開してはどうかと思いましたので検討をいただければと思います。

○山崎委員

今外国籍の方の話がいろいろ出てきているのですが、教育現場にいと、保護者の方はなかなか日本語が難しいということもあります。今までの話の中でまとめて考えていくと、ママ友・パパ友という話が少し前に出てきていて、PTA活動を少し拡大していこうかという話になっていたと思います。PTA活動を拡大して、ただ日本語があやふやな状態で参加してくれるかという、本当に手を差し伸べたいところの方々が、やっぱり漏れていってしまう可能性もあるのかなと思うんですね。だから、外国の方同士でつながりを持っていくとか、そういうところへのサポートというのもあっていいのではないかと思います。

子どもを見ていると、子どもが学校に入ってしまうと、割となじんでいたりもするのですが、保護者の方が実際に支援をするのはどうしていいかわからないとか、相談先がないというのは、結構感じているところなんですね。

伴走者としてそういう時に学校、小中でしたらスクールソーシャルワーカーが家庭の環境によつては入っていくことができると思うのですが。そういったところで伴走できる人、こういうことができるよ、というのを言ってあげられる人がいるというのは心強いのではないかなというのがまず1点ですね。

あとは今加藤先生からお話がありましたが、加藤先生も結構調べて今お話をしてくださったのですが、私も巡回相談員として行っていて思うのですが、足立区の不登校政策。私は自分で全部調べて仕事に入っているんですね。都の研修であくまでも通級特別教室の巡回相談員という扱いになっていますので、通級の入室判定とか、発達障がいのあるお子さんに対しての支援というところが、元々の立て付けでできているので行くのですが、実際に現場に行くと、気

になる子を見てくださってなってきた時に、不登校気味のお子さんを見るという機会が実際問題かなり多いんですね。

ただ、それを先生方にアドバイスをする時に、制度が分からなければアドバイスができない。だから実は教育現場とか支援する側も調べていかないと、どういう施策があるのかというところが入ってこないんですね。私も実際にいろいろ調べて、学校の先生にも実際にどうかというのをいろいろ聞きながらやりとりをしていくのですが、支援する側もある程度こういうものがあるというのを、先生方とかスクールカウンセラーが、ソーシャルワーカーはいろいろ動かれて連携を取られているので、結構お詳しいかと思うのですが、そういったところを支援する側もいろいろな情報をつかんでおいた方がいいのかなと思います。

○藤原会長

ありがとうございます。その支援にどういう制度があるかということこそ、A Iを使うといいのだろうなとは思いますが、A Iに時々刻々と変わる足立の制度を学習させることをやらないとできないですからね。そこはやる必要があるだろうなと思いました。またスクールソーシャルワーカーに集約されるかもしれない、例えばスクールソーシャルワーカーが全部の学校に配置されていて、通訳もできたらいいなと今思ったのですが、無理でしょうか。親支援も含めて議論を広げたいので、親支援のことも含めてコメントがあればお願いします。

○高木委員

最近本当にスクールソーシャルワーカーという言葉が非常にいろいろなところで飛び交うようになって、私はこの仕事を始めて15～16年経つのですが、最初本当にスクールソーシャルワーカーのSSWって、シンガーソングライターしか出てこなかった、そんな時代から今こんなに皆さんに期待されているというのが、非常にうれしいし、何度も挫折をしかけたのです

が、辞めなくて良かったなと思います。いろいろと山崎さんからいつもお話を振っていただいているのですが。今、現場はスクールソーシャルワーカーがいろいろな事業に関わり始めていて。子どもの貧困の食の支援とかの時も、非常にびっくりしたのですが、ゴールデンウィークの直前にその話が急に降りてきまして。ゴールデンウィークまでに何とかしなさいというような、いろいろなことがたくさんスクールソーシャルワーカーに期待されているんだなと思うので。確かに私たちもある程度の足立区の制度・施策を知らないと、ご家庭の親御さんにお話ができないので。足立区ってA3の用紙を見るだけでもこんなにあるのかって、私も改めて、自分たちもここまで追い付いていないというのが現状なんです。実際に私は自分で足を運んで見て確認して、それを親御さんとか子どもに伝えていかないと、意外とそれがずれていたりとか。私たちも中学生まで支援するので、進路の相談はしませんが、担任の先生がやることを少しお手伝いをするのに、夏休みを使って、都立高校の見学ツアーを組んで、行かせていただきました。やはりそうしていかないと、実は高校のことを知っているつもりで話すのですが、実は分からないこともたくさんありますので、私たちも日々できるだけ見学の場があったらお願いしますと言って見に行ったりとか、自分たちで足を運んで必ず確認をするようにするぐらい、足立区もこれからたくさんいろいろなことを考えていかないといけないのですが、A3の用紙を見るとこれだけあって、本当にこれを活用できたら、もうちょっと支援が行き届くのかなと思っています。

先ほど阿部先生からもコミュニティの話があったのですが、本当にフィリピンの方が確かにケースで多くて。フィリピンの保護者の方たちのコミュニティってとても強く、教会に大体いらして、いろいろな通帳とかもボスみたいな方が持っていたりとか。スクールソーシャルワーカーって、いろいろな話を聞いていますので、人のつながりというのが非常にフィリピンの方

って上手なんだなって思います。その中に私たちもうまく入って行って、いろいろ教えてもらいながら、お互いに教え合うことが多くて。私たちが一方的に、こういうのがいいですよ、とか営業をするわけではない。そこは人と人とのつながりというのが一番根本にあるなと思っています。

どんどん世の中便利になってきているのですが、やはり最終的には同じ今のこの状態のように、同じ空気とか皆さんの表情を見ながら温度を感じて、お話をしていくと、やはり信頼というところが一番大きいのかなと思っていて。信頼されないとまずお話を聞いてもらえないですし、玄関を開けてもらえないので。どんなに担任の先生につないでもらっても、まずその関係性づくりって本当に時間が掛かるところがありますので。やはり地道な活動というか、やっていくのかなというところではあります。

本当に支援するっておこがましい言い方ですが、我々も知識を付けたり、いろいろな人と出会って、その人たちとの関係性というのは非常に大事にしていかなければならないところがあります。

○藤原会長

ありがとうございます。様々なキーワードをいただきました。まずは信頼される関係性づくりですね。届けると言っても、もうあと20分ぐらいで締めないといけないのですが。議員の皆さんはいかがですか。

○ぬかが委員

最初の方に出てきた話の部分なのですが、子どもたちの自分の気持ちが出せる場所とか、居場所の関係で私が最近ちょっと思っていることがあって。足立区は地域学習センターが14か所あって、図書館とか体育館とかのセットが14か所あって、何年か前に、せっかくそんな場所があるから、足立の子って家でも勉強できる環境が意外とないし。机とかソファとかあるだけで居場所になるのではないかという議論をし

て。全部の地域学習センター、大小違いがあるのですが、廊下みたいなところに机を出しているだけとか、いろいろなところにあるのですが。全部そうやってくれるようになったんですよね。この前エルソフィアの梅島のところで、ちょうど放課後の時間に見ていたら、子どもたちがいっぱい。カードゲームをやっている子もいれば、勉強したくてしている子も、小学生と中学生が主なのですが、これ居場所だなってすごく思ったんですよ。

この前水戸で新しい施設に行った時にも、文化会館なんだけど、ロビーみたいなのがすごく広くて。そこにテーブルとかを置いていて、2階のフロアも3階のフロアも中高生でいっぱいなんです。場所取りするぐらいいっぱい。やっぱりそういうことを考えた時に、何か今あるものをそうやって活用して、ここの中に今見ていたら居場所って、小学生・中学生期だとギャラクシティの地下にあるGがくえん、これだけが書かれているのだけど、そういう今ある施設をぜひ活用しながら、もっともっといいものにブラッシュアップしていけたらと。あれがいいところは、誰かが付いていて、監視をしているのではなくて、自由に子どもたちが過ごせる場所というのはすごくいいのかなって。それが14か所あって、それにGがくえんクラブルームがあって、綾瀬のあやセンターぐるぐるも、放課後の時間は子どもたちがいっぱいいるようになって。そうすると、それだけでも16か所あって。その辺もメニューがたくさんですが、やっぱり大事な居場所じゃないかなって。そしてそれをブラッシュアップしてほしいなと思いました。

○藤原会長

ありがとうございます。地域学習センターは何時までですか。

○地域のちから推進部長

9時ですね。ちょっと補足すると、今ぬかが委員がおっしゃった通り、学習センターごとに

よってフリーで使える場所の大きさは全然違うのですが。去年の夏休みから初めて始めたのですが、夏休みは学習室の一つを子どもの居場所ということで、夏休み期間中解放して、ご飯を食べてもいいし、勉強してもいいし、遊んでもいいしという居場所の事業を去年の夏休みに初めて始めたんですね。

○藤原会長

中山委員。そのあたりとプレイパークの活動って連携していたりするのですか。

○中山委員

まだ連携はできていなくて。この間学生たちがエルソフィアに突撃して行って、「ここで僕たち、活動してもいいのですか？」みたいに言ったんですけど、あえなく撃沈してですね。いろいろ決まりがあるので、あまり自由には使えなくて、決まりに従って申請してみたいな形になるので。そのあたりがもうちょっと自由に子どもの居場所を、夏休みとかも学生とかボランティアとかいるだけでも違うのかなと思ったりですとか。保護者支援の話が続いていましたが、保護者支援はとても必要だと思いますし、重要だと思う一方、私自身も家庭環境がいろいろあって、まさに典型的な兄が非行に走って、高校を中退して、暴走族に入って、暴力団の人いろいろな取り込まれそうになって、18の時に家族でみんな夜逃げするという当事者真っ盛りな家族だったんです。そうなってくると、親だけではどうにもならないんですね。全くどうにもならなくて。最終的にはNPOの人たちに入ってもらって、いろいろ弁護士さんとかいろいろな人たちが手伝ってくれて、兄も社会復帰ができて、僕も無事大学に入れたのですが。

先ほど阿部先生の話にもあったかと思うのですが、チューターの話。家族の支援、保護者の支援もとても大事なのですが、家族以外に誰か頼れる人とか、つながれる人とか、自分の思いを話せる人がいるってすごく大事だと思います。そこがないと家族とうまく行かない、学

校もつまらない。そういう子たちと話していると、TikTokとか見ていると、何か同じような若い19歳、二十歳ぐらいの悪いやつが、何か悪いことをしているんだけど、やたら金を持っていて車を乗り回していたり。実際にト一横とか行ってみると、最初はすごく優しくて、疑似家族的なところがあって。ここは自分の居場所かも、みたいな感じでどんどん取り込まれて。うちの兄もまさしくそれに取り込まれて、同年代の悪いことをしているような人たちがベンツとか乗っていて、俺もそうやってなるんだみたいな感じでいろいろだまされていいように使われたのですが。そこを防ぐには、家族以外に自分が信頼できる人とか、僕は40歳ですが、40歳のおじさんでは難しいですね。中学生には、19歳、20歳のイケイケの悪いやつと僕らではちょっと難しくて。大学生とか、年も近くてちょっと中高生世代からすると、キラキラして見えたりとか、話を聞いてみようかなと思えるような人たちがもっと子どもの周りにいてほしいと思います。そういう地域学習センターとかが開放されているのであれば、そういうところに学生ボランティアがいたり、チューターで付いたりするだけでも、だいぶ変わってくるのではないかなと思いました。

○菊地委員

私も親御さん世帯のことは正直あまり分からないので、当事者というか、足立区の小学校・中学校に通っていた身としての意見しか出せないのですが。最初の方にいじめだったり、自殺だったりみたいな感じの話があったと思うのですが、私も通っていた時にいじめアンケートだったりとか、そういう薬物防止の教室、交通安全教室とか、本当にいろいろな教室があったのですが、正直あまり真面目に聞いている人がなくて。何となく書かされているから書いているだったりとか。逆にこれに書いてしまったら、先生に後から呼び出されて、いじめっ子と会って、いじめっ子が直接謝ってきたけど、それは建前で、結局最終的にまた後からグチグチ言わ

れちゃうだったりとか。そういう公共的なものだというのが分かっているからこそ、あえて書けない。どうしても近いはずなのに、ちょっと遠くなってしまっている。SNSは遠いはずなのに、何だか近くなってしまっていて、SNS関係のトラブルといったものが多発しているのは、そういうことがあるのかなと思うので。区として、たくさんアプローチをしていただいているというのは、すごく私自身も伝わってきて、本当にいろいろされているのだと思うのですが。形式張っているというか、やはりどこか気持ちの遠いのをもう少し寄り添ったというか、自分に向けたようなものを作れたらいいのではないかなと。中山委員もおっしゃっていたような、本当に心から許せるような場所だったりとか、より身近に感じられるものが、また家族とは別の場所にあるというのはすごくいいのではないかとは思いました。

○藤原会長

貴重なご意見、まさに現場の当事者の声をありがとうございます。

○小野委員

小野です。今日のお話をうかがっていて、この場には実施する側の人と、意見をする側の人がいると思うのですが。意見をする側の人から言うと、実施する側からすると、「いやもうやっていますよ」ということって、ほとんど今日はそれに該当していたと思うんですね。でも、それでもやっぱり何か解決していないこともたくさんあるということは、お金が足りなかったりとか、バジェットにリミットがあるということで、多分ほとんどのことがより広くできていないことが多いのではないかなと思ったんですね。なので、今言っていることを全部実現しようと、きめ細やかにしようと思うと、もっと広範囲にしようと思うとお金だけが膨らんでいて、多分不可能だと思うんですね。なので中小企業支援とかと一緒に、そういうことに取り組みたい中小企業を支援する方法で、自走をして

もらう形にたくさんのお金を掛けることで、解決していくというのは、やっぱり行政の立場としては難しいものなのではないかと思いました。

○福祉部長

福祉部長の千ヶ崎です。今の議論を聞いていてずっと考えていたのが、本丸は何なんだろうということだったんです。今おっしゃった寄り添った支援ということと言うと、今年の4月から福祉まると相談課を足立区は作ったんです。これは今までの縦割りではなくて、間に落ちてしまうような人たちでも相談を受けますよということをするんです。そこで挙がってきた案件を見ると、今日も職員と話したのですが、相談員が言うんです。大学に行っていて心配なお子さんがいるのですが、その子のお金の使い方を「これでは駄目だと言ってやらないと駄目だと僕は思うのですが、やっていいですか？」って言うんです。行政の職員ってそこまでは踏み込んでいないというのが実感としてあって。でもできないという思い込みもあるし、やっていないという思い込みもある。でもやろうとしたら、本当に莫大な人とお金と時間が掛かる。とすると、どこをどうやってやれば、そういう寄り添うことができるのか。一方で僕、高齢者の部門を見ていて、高齢者の中でも訪問介護の人、お医者さんとか、キーマンが必要なんですよ。さっき都立大では留学生に1人付けるということでしたが、キーマンがどうしても必要だと思っているんです。これまでの役所の相談の中でも、キーマンがいらないから相談を受けても、いつの間にか流れていくことがあって。僕の結論としては、キーマンを優先的に付けていけないといけない人にちゃんと付けていく。チューターということをしていましたが、そういうことが大切なかなと。生活保護も持っているんです、僕のところで。ケースワーカーがキーマンになるかということ、大学出たての、就職して1年目、2年目のケースワーカーがそんな困難な世帯のキーマンになり得るかということ、現実的には難しいんです。だからやっぱりキーマン

をどうやって養成して、誰に付けていくのか。こんなにある制度を、あなたはこれを使った方がいいですよとアドバイスをしあられる、そういうキーマンをちゃんと作るべきだと話を聞いていて思いました。

○藤原会長

ありがとうございます。私もそのように思っています。今までの話にも関わるし、プレイパークも見させていただいて、まさに子どもにとってのキーマンになるすごいキラキラした大学生たちがその場にいたんですね。中山さんのNPOに。でも、プレイパークに来るといって、公園に来る子としか会えない。大学生を卒業すると終わってしまう。持続性の問題があるので、そこをうまくシステムとして作れるといいなと思います。アウトリーチをしていく、。公園に来ることでもいいし、この子ということが分かれば、ボランティアの子が行って、コンビジットしてサポート・伴走することもありなのではないかと思ったりしました。千ヶ崎さんが言うような、スーパーバイズするシステムがあって、そこは区の職員かもしれない。百戦錬磨の中山さんかもしれない。いろいろなパターンがあると思うんですね。マッチングの問題というか。この人なら話を聞ける、この人なら信じられるという人って必ずしも一様ではないなと思うので。そうしたことがシステムとしてあると素晴らしい事業になると思いました。

学識の先生方、何かコメントがあればお願いします。

○山田委員

山田です。興味深くお話を聞かせていただきました。資料に戻るのですが、資料3の施策は、以前の足立区の第2期の子どもの貧困対策実施計画の参考例として割り振っていると理解しています。今出てきた話とも関わるのですが、こちらの1と3に関わることで、やっぱり今日の会議の前半で確認された基本方針の中で、共に作っていくという時に、子ども・若者がど

うやって柱1、柱3に参加していくとか、子ども・若者の声をどう聞いていくかということが、施策のレベルでも明文化されるといいかなと思います。今の柱1の参考には、子どもや若者は支援されたり、経験を提供される客体になっている印象を若干受けるので、その中で子どもや若者が意見を出していくこと自体が、生き抜く力を育むことにもつながるので、その柱1の中にそういうものがあるといいなと思います。柱3の共に支える仕組みを整えるアクターのひとつとして、子どもや若者自身が含まれると思いますので、そういう形で具体化していく時に検討していただくといいかなというのが一つです。

それから2点目は、柱の2に関するところですが、主に今日の資料だと4ページ目の子育て家庭の支援というところだと思うのですが。今日のA3の資料の2枚目。保護者への支援というところを見ると、子ども・若者への支援や、地域関係機関の支援と比べると、やや手薄に見えるので。ここもせっかく柱1では子どもと若年者というふうに、ライフステージの切れ目のなさみみたいなことが施策の中に入っているので、柱の2も青年期の保護者をサポートするような、そういう項目を明記すると、より整合するのかなと思いました。これまでのやりとりの中にも多分そういう趣旨の発言があったかと思うので、資料3に照らしてそういったことをぜひ施策の項目を具体化する時に検討をしていただければと思います。

○藤原会長

貴重なご意見ありがとうございます。

○末富委員

まず基本理念のところは、大変分かりやすく整理していただいて、足立区らしきがあっただけかなと思います。特に子どもたち向けにも説明していくことになるので、共に考え、共に進む足立というのがキーワードになると思うのですが。そうした時に、柱の1、2、3ってどう

分かりやすく伝えていくのかなというところがさっきから気に掛かっているんですね。山田先生がおっしゃったように、子ども自身が支援される方の文言だったり事業がすごく多いのですが。子ども・若者と作るというのが結構大事ななと思っています。例えばなのですが、PTAも正直ノルマ感があるんですね。親がやらなきゃいけないみたいなところがあるのですが。私自身は子どもたちがやりたいことをかなえるPTAなら、一緒にやりたいみたいな人って多分増えると思っているんです。特に小学校のPTAっていうのはそういうことが可能なので。ペアレントティーチャーアソシエーションって何のためにやっているのかというのは、子どものためだったんです、本来の出発点は。みんなそこを忘れていないか？みたいな。特に全国P連とか最近めっちゃくちゃなことになっていて、それで余計にPTA離脱が加速しているのですが。そこは置いておいて、せっかくここまで作ってきて、非加入の人もいらっしゃいますが、でも多くの親御さんが学校のために役に立ちたいみたいなモチベーションなんです。学校のためじゃなくて、学校で一緒に活動している子どもたちのためにやらないかい？というようにところも含めて、柱の文言がもうちょっと何か、例えば、安心して子育てができる環境を提供するってあるのですが。子どもたちのために何か一緒にやろうとPTAになった時には、安心して子育てができる環境って自分たちで作ったりもしているんですね。要するに支援される客体が、住民や子どもや保護者であるみたいな。もちろん足立には今までそうやって他の区では信じられないぐらいすごくいろいろな住民のアプローチをされているのですが。そこだけではないよねというのは思っています。

もう少し、共に考え、共に進むとの整合性を付けていただきたいという。計画マニアになっているので、いかに通っているかがすごく大事なことで。子どもたちに分かる、共に考え、共に進むという足立を大事にしているから、柱の1番目は子どもと若者と共にこれをするよとか、

親たちも支えるけど共に進むというような。その辺のつながりがあるといいかな。この間に文章でもポンチ絵でも入れていただいてもいいのですが。

それから、今後の審議会での検討事項ですが、実際の足立の事業の機能の仕方についても気になっていることがあります。明確に何かの条件に当てはまらないけど、やっぱり子どもを育てづらいという。低所得でもない。学校の先生が見ても、割と安定している。けどお母さんやお父さんにだけすごくきつく当たる子っているじゃないですか。それが相談しても見えない時に、すごく追い詰められるんですね。というようなケースに最近しばしば出会っていて。それがどこの支援のスキームにも引っかからないというのが気になっているんです。例えば障がいがあるとか、発達障がいのウェイティングリストに入っているとか、そういう分かりやすい基準ではない時にも、ちゃんと関われる行政であってほしいなと思うので。そのあたりのビジョンもちょっとあるといいかなと思います。

子ども自身が生まれ育った環境に左右されないもそうだけど、保護者が今置かれている環境ですよね。本当にこの子は育てづらいのだけど、誰もというか、この区の条件に引っかかるものがないみたいなところというのをなくしてほしいなとは思いました。ユニバーサルとターゲットの間。足立の場合、おそらくスクールソーシャルワーカーとかこども家庭センターとかで関わっていれば見えやすいのですが。自分のケースを相談していいのだと思えるようにするためには、もうちょっとターゲットとユニバーサルの間にあるようなお子さんたちやご家族に寄り添うことも結構大事なかなと思います。それから日本語指導とかもそうで。日本語指導の先生がちゃんと着任してもらうための条件。日本語ができないレベルの条件が結構厳しいんです。例えば大学受験もそうなのですが。日本に住んでいて3年以上経つと、大学受験のハードルが急に上がるとか。この国にはいろいろとターゲットとかユニバーサルが急に分断する線がいつぱ

いありまして。それをすべて足立区から、そういう垣根はなるべく取っ払って行って、そのニーズに合った形を追求できないかなと思いました。でもここまできれいに整理していただいて読みながら、それを考えたということです。

○藤原会長

ありがとうございます。本当にグレーゾーンが抜け落ちているというのは、全くその通りですね。そこはぜひ何か組み込める、多様性というのは一つのキーワードで、そういう枠組みの中でグレーゾーンを拾っていけるようなものにできたらなと思いました。また柱の中に共にというのがあるといいですね。それが明示されるといいのかなと思いました。柱3はありますけどね。これも、子ども・若者もお互いに支え合っていくというようなことですよね。それがもしかしたら小野委員が言っているような限られた資源・財政の中でもやっていけるようなものになるのかもしれないと思いました。

○しぶや委員

本当に今日皆様のお話を聞いて、現実的だなというような、現実的なことを皆様から意見をちょうだいしたというか、参考にさせてもらったのと、非常に勉強になりました。先ほどの山崎委員からも、何より行き届かないのが現実で、行き届くための工夫というのが、いかに施策として重要なのかということが改めて分かりました。先ほど菊地委員からのいじめのアンケートのことがありましたが、やっぱり未回答の方々が足立区の中でも多いところで、未回答の人たちに対するアプローチ。そこで終わりではなくて、未回答が多い中でのアプローチも、私も過去に一度議論をしたことがあったのですが、また改めてそういったところも拾っていかないといけないというのが分かりました。

あとは何より先ほどのプッシュ型のところで、長谷川副区長から非常にシーフォースというアプリのところで、親御さんに対しての情報量が多すぎるという課題があったと思うのですが。

これは若者に限るのですが、若い世代の方々がおっしゃることは同じで。足立区の公式LINEって今7万人ぐらい登録しているのですが。その足立区の公式LINEも一緒に、情報量が多すぎてなかなか足立区の施策全体も、子育ての施策に限らず、災害時の大事なことも書いてあるのですが、なかなかそこで見ないというのが現状ですね。また公式LINEも7万人からなかなか増えていかないということも現状であってですね。若者ってコスパとタイパの比率の良さというか、そういったところを見ていて、いかに短く効率良く情報が拾えるかというのが、若者が今求めているところなのかなと。TikTokのショート動画を見ていても、なぜ人気なのか。100万人以上のトップYouTubeの方にも聞いたのですが、そこは短くていかに情報が得られるかが大事だと思います。そのところを言っていたので、それは区としても、議会としてもしっかりと解決策に結び付けるところなのかなと思いましたので、しっかりと皆さんの意見を参考に勉強させてもらいました。ありがとうございました。

○太田委員

皆さんの意見、様々聞かせていただいて、大変勉強になりました。一つ感じたことは、今回の資料をまとめていただいた中で、ターゲットアプローチとあるのですが、本当に様々な施策をやっているなと思うのと同時に、様々なご相談をいただく中で、どうしても抜け落ちる点がいくつかあるかなと感じています。例えば学習支援のはばたき塾とかミライゼミをやっていると思いますが、一方でどうしてもスポーツですとか、音楽とか芸術面で、どうしてもお金が掛かってしまって夢を諦めざるを得ないという声もありますので、そういったところの支援もできないかなということも思います。発達障がいへの支援はあるのですが、それに似ているけれども、ちょっと違う学習障がいの方の相談も受けていまして。学習障がいの方って周りの人が特徴を理解して、適切な指導をすれば

普通に学習ができるのですが。まだまだその辺の理解が進んでいないなというのを感じています。様々あるのですが、こういったところはターゲットアプローチですので、しっかりと当事者のお子さんとかご家族の意見をしっかりと吸い上げる仕組みができていれば、一つひとつ拾い上げていく仕組みさえあれば、そこはきれいに埋まっていくことになると思うので。その仕組みづくりが今後大事なのだらうなと感じて聞いていました。

○藤原会長

ありがとうございます。まだまだ議論があると思いますが、今日はまとめなくてもいいということなので、以上で終わりたいと思います。

4. 第4回、第5回こども計画審議会の日程について

○藤原会長

では第4回、第5回の日程について事務局からお願いします。

○事務局

本日は様々なご意見をいただきましてありがとうございました。最後、次の第4回と第5回の日程についてご案内します。会場の都合により、第4回目については、令和7年の5月21日の水曜日。第5回目を令和7年8月27日の水曜日に開催したいと考えています。もし日程に都合の付かない委員がいらっしゃった場合には、事前にご説明をさせていただいた上で、開催までにご意見をいただければ、審議会場で共有をさせていただきたいと考えています。

○藤原会長

ありがとうございました。では今日は本当に活発な議論、またいつも通りにいただきましてありがとうございました。以上で終わりたいと思います。ありがとうございました。